

## [特別企画1]

人道としての血液事業  
—社長メッセージ—

近衛忠輝

日本赤十字社

このたび、日本血液事業学会が盛大に開催されますことを、心からお慶び申し上げます。

昨年、中島先生から、本学会で国際赤十字の話をとリクエストされたので、快諾しておりました。タイミングも、ちょうど2009年から8年間にわたる国際赤十字・赤新月社連盟会長の任期を終えるところでしたので、11月に帰国してから準備をするつもりでした。ところが、ようやく会長職を無事全うし、帰国した1カ月後の昨年末に大動脈解離を発症しました。おかげさまで間一髪、命拾いを致しました。手術では、輸血のお世話になりましたので、ご報告します。濃厚血液球34単位、凍結血漿28単位、血小板40単位に至ったと、後で知りました。血液事業に日々携わっている皆さん、そして献血して下さった方々は、私の命の恩人という訳です。

無事に退院し、復帰第一弾の表舞台が、皇居において天皇陛下から叙勲を拝受することでした。偶然にも5月8日、赤十字創設者アンリ・デュナンの誕生日であり、世界赤十字デー、そして私の79歳の誕生日でもありました。これもひとえに、全国のボランティアをはじめ、国内外の仲間たちの支えあつてのことであり、日々、人々の健康のために従事する皆さんを代表して、いただいたものと深く感謝しております。本来ならば、本日、皆さんに報告とお礼を申し上げ、また激励に伺うべきところ、今回は無理をせず、見送らせていただいた次第です。

今、身をもって血液事業のありがたさを痛感しております。そもそも、なぜ日赤が本格的に血液事業に携わるようになったのか。それは1964年のライシャワー事件が発端ですが、その後国際赤十字・赤新月社連盟が、血液事業を赤十字に相応しい活動であるとして、各国に積極的に取り組むことを勧める決議を採択したことも大きな要因でした。血液事業は、ボランティア精神を結集する事業であり、かつ、その集まった善意をすべての人に対して、公平に扱わなければならない、人道活動です。

ご存知のとおり、血液事業の今日までの道のりは、決して平坦なものではありませんでした。しかし、相次いで目の前に立ちだかるさまざまな問題に対して、見直しや変更、改革を恐れず、関係者が柔軟に、そして大きく対応してきた結果、今日があると考えています。また自国の血液のみならず、海外、とくにアジア地域との支援関係を構築するなど、日本の血液事業は海を越えて、多くの人々の命を救っています。世界の191の赤十字社の中で、約150カ国の赤十字社が血液事業に何らかの形で関わっていますが、その中でも日赤の血液事業は、世界に誇れるものと、昨年まで国際赤十字・赤新月社連盟の会長であった私の目から見て、確信しております。

時代は変化します。今や、医療の技術進歩によって、多くの手術が輸血なしで行えるようになり、再生医療技術の進歩により、人工的な血液製剤の開発が進められています。私たちは、このような

時代の変化に、柔軟に対応し、変化してゆく勇気が、ますます求められることでしょう。

しかし、今もなお、私自身のように、国民のニーズがある限り、献血、採血から輸血にいたるまでの「Blood Chain」が途切れることのないよう、

私たちは血液事業を継続する使命を果たさなければなりません。

これからも、健全な血液事業が展開されることを願い、皆様のご健勝と、益々のご活躍を祈念申し上げ、メッセージと致します。